

これが定年後の落とし穴 大宮知信

再就職の難しさ、金融商品の勧誘、田舎暮らしと都会暮らし、夫婦の関係——どれも身近なテーマであり、書かれている内容も興味深い話が多かった。

定年後就職活動を始めると博然とすることになる。これまで培った経験やキャリアが活かせるような仕事はまずないと思ったほうがいい。希望にかなうような求人があっても面接にたどり着くまでがひと苦労だ。とくに事務系の仕事は極めて少ない。運よく採用されたとしても正社員ではなく、パートタイムか派遣社員か業務請負的な契約社員がほとんどである。給料は新卒の若者並みで十五、六万円もらえればいいほうだ。一〇万円というケースも珍しくない。団塊の世代の八潮は定年後も働くことを希望しているが、再就職のカベはとてつもなく高くて厚い。

最近のケースだが、ビル清掃会社の従業員募集に二、三十人の求職者が集まった。定年退職者のA氏が面接に行くと、清掃会社の担当者がこれから採用試験をやるからということで、大手新聞社に連れて行かれて応募した人たち全員で建物の清掃作業をさせられた。ところがだれも採用されなかった。つまり採用試験と称してただ働きをさせられてしまったというわけだ。本当に嫌な世の中になったなと思う。こういう悪質な企業が世の中にはごまんとある。

このロコ・ロンドン金取引を持ちかけ、出資金をだまし取ったとして二〇〇八年九月二五日、貴金属販売業の経営者ら九人が詐欺容疑で警察に逮捕された。数年前から被害者が続出して社会問題になっていたが、ロコ・ロンドン金取引での逮捕はこれが初めてだ。資金はまったく運用しておらず、最初からだまし取るつもりだったようだ。この業者はコールセンターに一〇〇人の人員を擁し、電話勧誘して興味を持った人にうまく取り入って、約七〇〇人から約三人億円を集めていた。

株取引を営業として行うには証券取引法による証券業の登録が必要である。国民生活センターが金融庁で確認したところ、この業者の登録はなかった。

「上場益が期待できる」と、未公開株の購入を勧める電話が自宅に何度も掛かってきた。興味を示すと、販売員がすぐに自宅にやってきて、言葉巧みに未公開株を勧められ、総額一一〇〇万円も契約してしまった。ところが、上場すると説明された時期が来てもどの会社も上場しない——というのが典型的なパターン。

「上場益が期待できる」はずが、逆に老後のために貯えた財産を奪われてしまう。近年の未公開株をめぐるトラブルは、知らない間に「任意組合」とか「投資事業有限責任組合」などの組合員にさせられ、その組合が行う事業に出資する、という形で強引に契約をさせてしまうケースが目立つ。

最近話題になっている金融商品に「ラップ口座」というのがある。証券会社（一部の信託銀行でも扱っている）が日々の運用に当たる「一任投資」のことで、金融機関が顧客の資産運用と管理を丸ごと引き受けることから、包括的サービスという意味で「ラップ口座」（包む=Wrap）という名称で呼ばれるようになった。金融機関の担当者がサービス内容やリスクについての説明をした後「投資一任契約」を結んで、国内外の株式や債券などを組み合わせたラップ専用投資信託で運用がスタートする。早い話が「お任せいただけるのであれば、うまくやりますよ」という商品である。

ところが、そううまくはいかない。以前は億単位の資産運用を一手に引き受ける、富裕層向けサービスだった。二〇〇四年の規制緩和で、証券会社の支店での取り扱いが認められるようになったため、各社が相次いで最低利用額を引き下げてきた。最低契約金額が五〇〇万円というところもある。この金融商品もターゲットは団塊の世代だそうである。これまでは一部の金持ちだけを相手にしてきたが、団塊世代の退職金を取り込むために門戸を広げたというわけだ。

・・・

現在十数社がラップ口座を販売しているが、各社の運用実績が公表されていないため、どこの会社のパフォーマンスがいいのかまったくわからない。金融機関の甘い勧誘はもちろんのこと、安易に営業マンの口車に乗って運用を任せてはいけない。

恥ずかしながら、私もこれと同じ手口でやられた。場所はマドリードではなくバルセロナの旧市街。三人組の男に後ろから羽交い締めになされ首を絞められるところまでは同じだが、私の場合は催涙スプレーを顔面に噴射されるというおまけが付いた。顔全体が熱くなり、まるで唐辛子でも目に擦り込まれたような激しい痛みを覚え、ぼろぼろ涙が流れて何も見えなくなった。これでついにオレもお陀仏かと思った。私が一瞬ひるんだすきに、男たちは一眼レフカメラとショルダーバッグ（ともに出発前に買ったばかりの新品）を奪って走り去った。バッグにはトラベラーズチェック、免税店で買ったクロスの金ぴかボールペン、アドレスブック、帰りの航空券まで入っていた。盗られなかったのはポケットに持っていた一食分程度の小銭だけで、まさに身ぐるみはがされた。

強盗のことをスペインの俗語で「チョリソ」という。スペインの治安がよくないことは知っていたし、気を付けていたつもりだ。原因はハッキリしている。ひと言でいえば油断していたということだ。またスペインにこられたことがうれしくて、弛みきった表情の緊張感のない顔で歩いていた。午後三時頃、ちょうど昼食後のシiesta（昼寝）の時間で、ひと気がない路地をどこから見ても観光客然としたスタイルで歩いているのだから、襲われないほうがおかしい。チョリソにしてみれば、ネギを背負ったカモが歩いているように見えたのだろう。

・・・

スペインで首絞め強盗にやられた後、一応マドリードの日本大使館へ行って被害に遭ったことを報告した。ガイドブックを見ると「海外で事故やトラブルがあったときは大使館

へ行きなさい」というようなことが書かれている。滞在費はおろか、航空券も盗られてしまったので、帰りのチケットもない。航空会社に再発行を掛け合ってくれるかなと思ったが、応対に出た職員はガラス越しにこちらを一瞥し「そういうことがあったという話は聞いていません。最近強盗が増えてますからね、気を付けてください」と言っただけで、まるで私がウソの申告をしていると言わんばかりの態度であった。

海外長期滞在生活者の

間では「**現地の親切そうな日本人に気を付けよ**」というのが合言葉になっている。日本人の自称ボランティアに誘われ、**高額の手数料**でコンドミニアムを契約させられたといった例は枚挙にいとまがない。

日本人特有のゼノフォビア（外国人恐怖症）

ところが別荘地は、山に囲まれ景観に恵まれてい

るが土砂崩れなど自然災害の危険が高く、しかも近くの自衛隊駐屯地で頻繁に行われる演習の騒音に悩まされ、売り物の温泉も水温が低く期待外れだった。おまけに移住前に比べて**国民健康保険料は約二倍**に。人口の少ない自治体では保険財政の規模が小さいだけに、一人ひとりの負担は重くならざるを得ないのだ。元サラリーマンは、わずか二年間でここでの「田舎暮らし」に別れをつげた。

東京の田端で長くアパート暮らしをしていたが、十数年前母親の介護のため生まれた家に戻った。当初は田舎へ引っ込んだら**生活費が安く上がり、さぞかしたっぷり貯金ができるだろう**と思っていた。ところが、である。安いのは居住費ぐらいで、田舎暮らしは存外にかネがかかるのだ。

例えば冠婚葬祭などの交際費。田舎は血縁を中心とした顔の見える濃厚な人間関係が当たり前になっていて、付き合いも家族単位だ。学校の仲間や友人知人も大勢いる。親戚の葬式だと香典の他に、花輪やお供物の盛りかごの費用まで負担しなければならない。おまけにたいてい斎場は遠いところにあり、バスや電車などの公共交通機関がないため私のように車がないと往復タクシーを利用することになる。

逆説的だが、シンプル・リビングは都会にこそあるという人もいる。**都会に人が集まるのはシンプルに生きることができるから**で、田舎で自給自足的な生活をしようと思えば思うほど、厄介な仕事待ちかまえている。田舎暮らしのスローライフはなかなか大変だということを前にも言ったが、例えば草取り。夏の炎天下に草取りをするのは大変な重労働である。畑の手入れ、花壇の種蒔き、庭木の剪定、落ち葉の清掃。家庭菜園が趣味のわが家のお隣さんは、年中忙しく動き回っている。ときどき野菜をくれるのは感謝しているけ

ど、怠惰な私には真似ができない。

団塊の世代は都会と田舎の両方を楽しみたいという欲ばりな人が多い。それをかなえるのが「二地域居住」生活。二〇〇五年頃から使われ始めた言葉で、仕事のある人や都会を離れられない事情のある人など、完全移住には踏み切れない中高年に現実的な選択肢として注目されている。二〇三〇年には「二地域居住者」は一〇〇〇万人を超えるという国交省の試算もある。都会と田舎のそれぞれいいところを享受する一挙両得、二地域の「いいとこ取り」だけを考えた新しいライフスタイルだが、問題は費用だ。二重生活だから、当然生活費も二重にかかる。

都会だったら日常生活に必要なものはすべてカネで買うことができる。困ったことがあれば業者にきてもらうか店で買うというのが都会での生活である。日常生活を快適に過ごすためのインフラが整っていない農山村では、業者に頼みたくてもきてもらえず、自分でやらなければならないことが多い。

どんな商売にもリスクはあるが、とりわけ出版はリスクが高いビジネスである。売れば大きな利益を得ることができるが、売れなければ経費を回収できず赤字となる。プロの編集者、ライターは自分たちが企画し制作した本は絶対にヒットすると思っ出す。ところが、精魂込めて原稿を書き編集作業をして作っても売れるのはその中のごく一部で、現実には死屍累々である。返本の山になることも珍しくない。

日記のように単なる記録として書いている分には、何も問題はない。多くの人に見せたい、読ませたい、自慢したいという欲求が出てくると危ない。自分の技術的レベルが向上してくると、ひょっとしたら出版したら売れるのではないかと思いがちだ。

また、草取りや虫取りなどの農作業はかがんですることが多いため、**家庭菜園をやっている人はたいがい腰を痛める**そうだ。竹間氏も慢性の腰痛持ちになってしまった。

別れないまでも、若い頃の愛なんてとっくにないわという女房族にとって夫は「いなくても困るけど、ずっといても困る」存在なのだ。

置物のような夫がいる。話しかけても「ああ」とか「うん」と言うだけで、積極的に会話をしようとする夫に物足りなさを感じるという女性が多い。現役時代は会社の仕事から話の糸口ができるが、定年退職すると仕事の話がなくなるので、話すきっかけが生まれない。家の中がシーンと静まりかえり、楽しいはずの夕飯もまるでお通夜のときのような食事になっている。好きな音楽のCDでもかけて、バーか居酒屋のような雰囲気 연출

するなど、沈黙の気まずさを避ける工夫も必要だろう。

団塊シニアの友人が、妻に「友人の〇〇が離婚したよ」という話をしたところ、妻は夫を指さして「次はあなたの番ね」と言ったという。しかも真剣な顔で言ったそう。妻は子供たちからも「もういい加減別れたら」と言われているという。これは人ごとではない。私もいつ妻にそう言われるかわからない。

「成功加齢者」という言葉がある。米国マッカーサー財団のジョン・W・ローウエという博士が、上手に年を取ることを「成功加齢」(サクセスフルエイジング)という言葉で表している。『年齢の嘘』(日経BP社)によると、「老いを成功させる」秘訣は**適度な運動と食生活によって心身の働きを高いレベルに保ち、生産的な活動を続け、良好な人間関係を持って、新しいことに挑戦し積極的な生き方を心掛けること**だという。「もう年だから無理」という人の多くは思い込みで、知性や体力は何歳からでも強化できる。会社を辞めた途端に抜け殻になってしまうような人は、もうその時点で「成功加齢者」失格である。